


Story やさしい眼差しで  
家族を見守ったバッチョ


ちょうど家を新築して犬が欲しいと思っていたOさん一家が、里親を募集していた方から譲り受けたミックス犬「バッチョ」。当時、長男が大好きだったサッカ―選手のロベルト・バッチョにあやかっけて名付けられたこの男の子は、本当に人の気持ちがかかる優しい子だった。

体調がすぐれない家族の側にすつと寄ってきて、足元にちょこんと寄り添うように座ることも。ちゃっかりとした二面もあり、夏はエアコンの前、冬はコタツの中と、いつも家の中で一番快適な場所にいるので、Oさん一家とバッチョはいつもくっつくように生活していた。

バッチョのお散歩タイムは1日3回。朝は新聞屋さんがやって来る夜明けごろに「フーン」となっておねだり。いつもお父さんと織田が浜まで散歩に出かけた。毎日寝不足になってしまうお父さんは、散歩の後はいつもしばらく取っていたそうだ。



長男がお嫁さんを初めて家に連れてきた時も、バッチョはその静かな眼差しで見守っていた。その数日後、自分の役目を果たしたと思ったのだろうか、お父さんの腕の中で眠るように17歳10ヶ月の生涯を閉じた。天国に旅立った次の日、オアシスさんが駆けつけてくれて、よく散歩で出かけた織田が涙で家族みんなまで茶毘に付した。お花も用意してくれ、人間と同じように接してくれたのが感動的だったとOさんは語る。バッチョは大好きだった海を見ながら、今でもOさん一家を見守っていることだろう。

Story 成犬になってから  
一家の一員になったクンクン

ヨーキーの男の子、クンクンがやってきたのは、先住犬が亡くなってまだ日も浅かった頃のこと。たまたま知り合いがペットショップで処分する犬がいるので飼わないかと話をもってきたので飼ったのだ。最初は心の準備も出来ていなかったから、どうしようか悩んだけど、かわいそうに思えて引き取ることをOさん一家は決意したそうだ。

クンクンは既に成犬だったので、最初は全然慣れずにコタツの下にずっと隠れていた。でも、だんだん心を開いてくれて、随分いろんな芸を身に付けたそうだ。ゴロンからお手、おかわり、チンチン、ちょうだいまで、大人しい子だったけど、頭がよくとても芸達者だった。また食いしん坊でおねだり上手だった彼は、どんどん横に成長を重ねて、この犬種にしては5kgとかなりの巨漢に。でも、大きな体をしていても、その名前の由来通りにクーンと甘えて鼻を鳴らしていたそうだ。

特に思い出深いのは、小6だった息子の夏休みの調べ物のために家族で高知に出かけた時のこと。ドライブのストレスからか、急にお腹を下してしまったクンクンのお尻を洗おうとして、波が強い桂浜お父さんが悪戦苦闘したことは今でも語り草になっているという。心臓が弱かったクンクンは、病院にマメに通っていたが、最後の日はものすごく鳴いて家族を呼んで、あつという間に息を引き取った。本当に突然の出来事だった。悲しみにくれる中、オアシスさんが正装をしてやってきて、人間と同じようにキチンと吊ってくれて、とても感動したという。

今、お遺骨はお父さんの部屋、写真は玄関に飾られている。今夜も彼はきつとみんなの元気な「ただいま」の声を待っている。

オアシス通信

2017年  
春・夏号

vol.07

— 発行 —  
ペットセレモニー  
オアシス  
西条市大町1699-24

オアシス通信とは

ペットセレモニーオアシスを利用してくださった飼い主さんとペットとの大切な思い出を綴った、心あたたまるストーリーをお届けします。

可愛いデザインの  
フォトフレーム  
承ります思い出の写真を加工、  
フォトフレームに入れて  
お供えます。

2,000円(税別)